



パリ・オペラ座での引退公演で、ベジャールの『ボレロ』を踊り終えた後のニコラ・ル・リッシュ Photo: E. Kauldhar/Dance Europe

ニコラ・ル・リッシュ引退公演

世界広しといえども、引退してゆくダンサーをこのように送り出せるバレエ団は、パリ・オペラ座をおいてない——まさに特別な一夜となったこの公演の様子を、エマ・コールダーがお伝えます。

ガルニエ宮内の由緒あるグラン・フォワイエで行われた終演後のパーティで、ル・リッシュはめくるめくような高揚感の中でシーズンの終わりを迎えていた。公演が今期最大の人気を博しただけでなく(チケットは何ヶ月も前に完売していた)、その場にはフランスのマニュエル・ヴァルス首相、オーレリ・フィリペッティ文化大臣、クリスチャン・トービラ司法大臣らが同席し、イングリッシュ・ナショナル・バレエの芸術監督タマラ・ロホの姿も見られた。特別興行としてArteから世界中に同時配信されたこのプログラムは、このエトワール自身が考え、32年に及ぶ彼の同団におけるキャリアの最高の瞬間をたどるものだった。

ル・リッシュは1982年にパリ・オペラ座バレエ学校に入学し、『旅芸人』で振付家ローラン・プティと出会う。同作品の抜粋を現在のバレエ学校の生徒たちと踊るといのはじつはこの場にふさわしい趣向で、それに、フランチェスコ・ムラによるリシーン振付『卒業舞踏会』の鼓手のソロが続く。ル・リッシュ自身がこれを踊ったのはバレエ団入団前の1988年、16歳のときのことだった。

ル・リッシュはヌレエフにより指名された最年少のエトワールであり、彼の引退は熱狂の時代の終わりを告げるものである。絵はがきのように美しい『ライモンダ』はその確信の日々の証しであり、この歴史絵巻バレエの3幕のアンサンブルシーンからの短い抜粋には、アブデラム役としてステファン・ビュリオン、ライモンダ役としてドロテ・ジルバール(このたび長女を出産し、オペラ座に復帰予定)がカメオ出演して華を添えた。

『若者と死』はル・リッシュの名前と分ちがたく結ばれてきたバレエだが、42歳となり引退を迎えようとしているダンサーには厳しい試練である。1946年の初演から今日まで、プティのこの振付は主演者にとって肉体的に巨大な壁として立ちはだかかってきた。力強い跳躍や荒々しい家具の扱い方だけでなく、踏みこまれた魂を確信を持って描かなければならない難しさがあるが、ル・リッシュはそれらすべてを見事に体現し、共演のエレオノラ・アッパニャートも思わせぶりな悪女を完

璧に演じた。

次なるマッツ・エックの『アパルトマン』は、その対極にあるかのような作品であり、粋な選択である。彼にとってこれが初めてのエック作品ではなかったが、『アパルトマン』は彼のために創られたバレエであり、その創造は「要求が高く誠実を絵に描いたような天才と過ごした、素晴らしい時間」だったという。“ドアのパ・ド・ドゥ”を共演し、近年エック作品を踊らせて並ぶ者のないシルヴィ・ギエムにとっては、これはダンサーとしての第一歩を踏み出した我が家への帰還でもあった。二人の芸術家が人間性への敬意という一点でをひとつに溶け合うさまは、この夜の感動に満ちたハイライトだった。(ギエムは、今のうちに観ておくことをお勧めする。終演後のパーティで彼女は私に、2015年にロンドン、パリ、東京で引退公演を行い舞台から退くことを考えていると語った。)

とはいえ、これはル・リッシュのための夕べであり(終演後に芸術文化勲章コマンドゥール章を授与され、シャンパンで祝われた)、『アパルトマン』に続いては、彼自身の振付による『カリギュラ』の抜粋が披露された。マチュー・ガニオ演じる皇帝カリギュラの周囲を、オドリック・ベザール演じる愛馬インキタトゥスがギャロップする。短くも甘美なこの演目の間、ル・リッシュは公演の最後を飾る作品、すなわちモーリス・ベジャール振付の伝説的『ボレロ』のために支度を整えた。そして官能的かつダンサーにとっては過酷なラヴェルの音楽に内側から力を漲らせて踊り、同僚のエトワールであるジョシュア・オフアルトとカール・パケットを含む上半身をむき出しにし腰を突き出した男性たちがその周囲を取り巻いた。

終演後には、現代のガルニエ宮で観られたもつとも長く、熱のこもったスタンディング・オベーションが続いた。生来のカリスマ性で自らの踊る役のすべてを彩ってきたこの傑出したアーティストに、去らないでと誰もが求めていた。だがおよそ20分の後、緞帳は再び上がることはなく、私は癒しようのない悲しみとともに、これからのオペラ座はもう今までと同じではありえないと悟ったのだった。(訳:長野由紀)